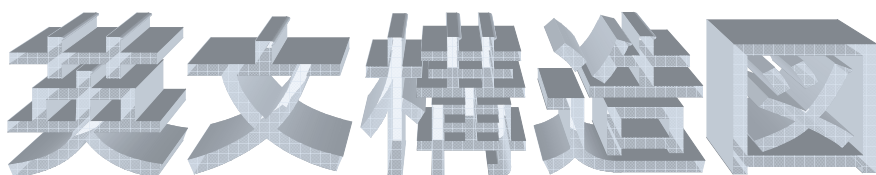
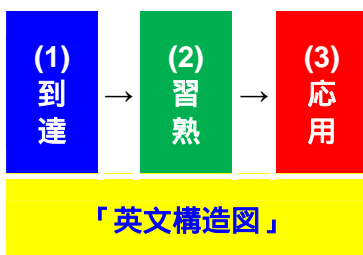


学習と実践を強力に支援する

< 手書き版 >



- 復活版 -



©物好鬼 2012

まえがき

言語は文の集まり

言語活動と言えば「話す」「書く」「聞く」「読む」であり、それぞれに多数の教材が存在している。もちろん文法や音声面についての教材もある。しかし、言語活動における＜言語＞とは、何よりも「文」を基本的な単位とした存在である。

もちろん「文」の中には更に細かな要素があるのであるが、それらは「文」の中での位置づけ抜きに語ることはできないものである。その意味において、「文」という単位が持つ重要性は特別なものであると言ってよいであろう。

文を攻略するために

ゆえに、語学においては個々の「文」を攻略することが極めて大切である。

では、そのために必要なことは何か？ 語句を覚えることはもちろんであるが、同時に文の構造を的確に理解し、運用できるようになることも必要である。

どうやればよいか？

さて、文の構造を理解する方法としては、図に書いてみるこ
とが有効である。そのための方法はいろいろ提案されてきては
いるが、いずれの方法も学習者向けの決定版とはなっていない
ように思われる。

「英文構造図」の登場

そこで開発されたのが、本書で紹介する新しい「英文構造図」である。本方式は、使いやすく、読みやすく、覚えやすいものでありながら、学習者に必要とされる程度の厳密さも十分に維持したものである。

是非ご活用を

本書は全体的にマニュアル風の体裁で読みやすくしてある。本書をいつも手元に置いて、必要なところをマメに参照しながら活用していただければ幸いである。

今回の版では（「復活版」のための付記）

この「手書き版」は現行のもの（PC版）に比べると緻密さではやや劣りますが、初学者が手軽に使うという面ではむしろ優れています。

そこでこの本は、初学者自身、そして初学者を指導している方々を主なターゲットとして用意しました。

内容的には、2年前に発行したPDF書籍とほぼ同じですが、読みやすくするために改ページを入れたため、見かけのページ数は増えています。

なお、その後の新しい情報やもっと緻密な説明については、現在発売中の「三部作」をご参照ください。

2012年9月9日

著者

『手書き版・英文構造図』復活版

目 次

まえがき	2
目 次	4

序章 英文構造図とは 1

1 既存の方法	1
2 新しい記法の提案	3

第1章 構造図の作成方法 5

1 文の基本構造から	5
S V を例にした基本ルール	5
S V C	10
S V O と S V O O	12
S V O C	15
その他の要素	17
疑問詞	20
関係詞	24
比較	29
it を使った構文	31
接続詞	35
その他の構文	37
2 構造図の実践例	41
図式化実験	41
手書きの実例	43

第2章 構造図の活用方法46

1 基本的な活用方法	46
構造図の特徴と効果	46
使い方の全体像	48
どんな素材がよいか	50
手書きかパソコンか	51
賢い使い方	52
2 例文学習での活用方法	53
構造を理解するときに	53
例文を覚えるときに	54
4 技能実践のときに	59

序章 英文構造図とは

1 既存の方法

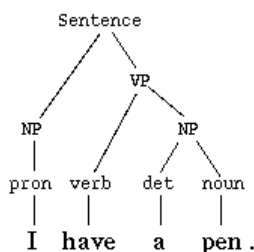
文構造視覚化の方法

構造図と呼べるものは過去にも存在している。

樹形図

例えば言語学で使われている樹形図。「構文木(こうぶんぎ)」などとも呼ばれ、次のような形をしている。

出典：<http://upload.wikimedia.org/wikipedia/ja/2/2c/EnglishSyntaxTreeSample1.png>



文法構造図

また、早坂高則・戸田征男『リストラ・学習英文法』（松柏社）で提唱されている「文法構造図」はかなり緻密に作られており、文の構造について詳細に検討したい場合に非常に有効である。

他にも

その他、奥田強『チャンクで実践！ あなたの英語』（チクマ秀版社）の「チャンク・チャート」や高見忠『クリエイティブ・ラーニングによる 実戦！超記憶術』（KKベストセラーズ）の「センテンス・フロー」も有益な方法であるし、英作文・英文法・英文解釈などの参考書で数種類の記法を見た記憶がある。私が知らないものも少なからずあるであろう。

2 新しい記法の提案

どんなものがよ
いか

では、英文の構造図としてはどのようなものが理想的なの
であろうか？

もし仮に理論的な検討が主目的であれば、何よりも緻密さが
最優先されるべきであろう。そのために分かりやすさがある程
度犠牲になることはやむを得ない。上で紹介したいくつかの記
法がそれに当てはまる。

学習用として

しかし、**英文を学習するという観点からは、分かりやすさが
ヨリ重視されなくてはならない**。具体的には次のような点が挙
げられる。

- ・ 原文の語順が保存されていて、復元が容易である。
- ・ 文全体における各チャンク（要素）間の相互関係が明瞭である。
- ・ チャンクの種類・役割が識別しやすい。
- ・ 各チャンクの内部構造が分かりやすい。
- ・ 入れ子構造が無理なく視覚化されている。
- ・ 解釈にも作文にも役立つ。

それなりの緻密
さも

また、『リストラ・学習英文法』には、構造図において示されるべき文法関係として

1. 動詞とその主語，目的語，補語との関係
2. 前置詞とその目的語，補語との関係
3. 修飾関係
4. 補文化子と節の関係
5. 等位関係
6. 同格関係
7. 独立関係
8. 引 用
9. 動詞構成関係

を提示（p.19）したうえで、

これだけのものを段階的に cyclic に用いることによって英文のすべての構造を記述しようとするものである。従来の文法教科書・学習参考書等に含まれている数多くの項目も、考え方を統一し視点を定めて整理すれば、このわずか9項目で整然と収まりがつく。

と述べている（p.20）。となれば、これらの文法関係を的確に表示できることは、新しい構造図においても必須であると考えられるべきであろう。

さて

これらの要求を満たすような新しい構造図が欲しいわけであるが、はたしてそんなことが可能なのか？ 答えはYESであり、それが本書のテーマである。

第1章 構造図の作成方法

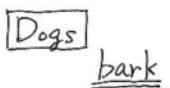
1 文の基本構造から

S Vを例にした基本ルール

S V

いわゆる第1文型。

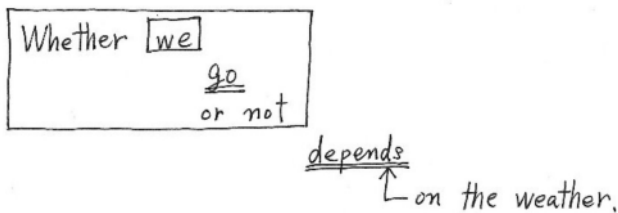
まず主部を書き、長方形で囲む。動詞は主部の右下に置き、下に二重線を引く。



Dogs bark.

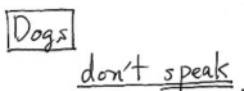
このように、意味のカタマリごとに横方向にも縦方向にもずらず、というのが本方式のミソである。そうすることにより、要素と要素の間を線で結びやすくなる。それは複雑な構造のときに威力を発揮する。

主部が節になっているときは、節全体を囲む。主部の中に更に主部 - 述部が存在していること（入れ子構造）が明確に示される。もちろん、主部以外の要素についても同様である。



否定・疑問・否定
疑問

否定では、“do”や“not”などは動詞と同じ行に書き、下線を引く。ただし、動詞そのものは下線を二重にしておく。



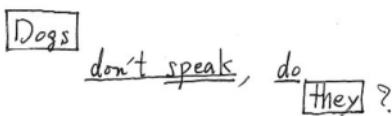
一般疑問文の助動詞は主部の前に置く（煩雑になるのを避けるため下線は引かない）。主部の直後に残っている動詞そのものとの関係を示すために、両者をL字形の線で結ぶ。



否定疑問も同様にすればよい。



付加疑問は、例えば次のようにすればよいであろう。



時制の表し方

“will” “have” “be”などは“do”と同様に扱う。つまり、平叙文では下線を1本引き、疑問文では主部の前に移動させて、残った部分との間をL字形の線で結ぶ。これは他の助動詞でも同様である。

動詞そのものは、“ing”等の語尾も含めて、下線を二重にする。

Dogs are barking

It
will have been raining
↑ a whole week
↑ tomorrow.

SVM、SVA

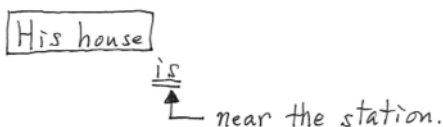
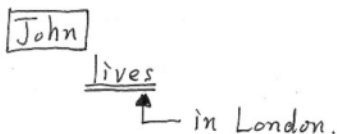
動詞を修飾する副詞語句（M）は動詞の右下に置き、動詞に向かってL字形の矢印を伸ばす。

“very quickly”は“very quickly”と書くことも可能ではあるが、通常はそのままの形で表示する。（簡単に理解できるものを複雑に表現する必要はない。）

She can run very quickly.

なお、名詞を形容詞句・形容詞節で修飾する場合や、形容詞や副詞を副詞・副詞句・副詞節で修飾する場合にも、同じ方法を用いる。

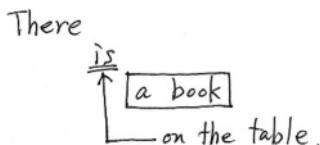
第1文型の亜種として、修飾語句がいわゆる**義務的な副詞語句** (adjunct) である場合がある。その場合は、その部分が義務的であることを示すために、**矢印の頭を別の種類にすることもできる** (ここでは にした)。



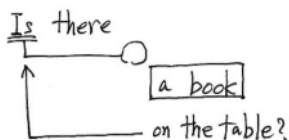
本書では、存在を表す be 動詞が作る文型は、SVC (第2文型) ではなく SVA (第1文型の亜種) であると考えている。もし SVC と考えたいのであれば、そのように扱うことも可能である。

There 構文

特殊な語順をとっているため配置の仕方に迷うかもしれないが、これも原則にしたがって、**主部と動詞と副詞とが互いに斜めになるように配置**すればよい。なお、“There”は主語に準じた扱いを受けるので、それを意識するために で囲むなどしてもよい。



疑問文にするときは、be 動詞を there の前に出す(“There”は主語に似ている)。be 動詞があった場所はカラになるので、目印として「 」を書いておく。



動詞が一般動詞の場合も同じ要領でよい。左の例は感嘆文であるが、**どんな語順になっても、「横方向にも縦方向にもずらす」という原則に従えばよい**ことが分かるであろう。



SVC

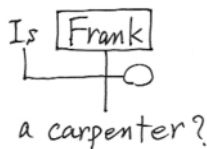
単純なSVC

いわゆる第2文型。大ざっぱには「イコール」という構造になっている。その関係を明確にするため、図式化するときには、**主格補語()は主部()の真下に置き、両者の間を縦線で結ぶ。**

動詞はその線の右横に書く。主部の右下に置くよりも、縦線との密接な関係が見えやすくなる。



疑問文の扱いはS Vの場合と同様であるが、線が必然的に交差することになる。



be 動詞に限らず、“become”などの場合も同様にする。



SVCの命令

命令文なので補語に対応する主部は表示されないが、小さな印を書くことで頭の中にイメージする。（下例の場合は“you”。）

Be
quiet.

Cが分詞のとき

図のようにすればよい。下例の場合、“being asked”が形容詞として扱われている。

The same question
kept
being asked.

SVCA

第2文型の亜種で、主格補語である形容詞に、前置詞句が義務的に付加される場合。**義務的な修飾**であることを示すために、矢印の頭を にしてみた（SVA参照）。

John
is
fond
↑ of cats.

Mary
is
good
↑ at mathematics.

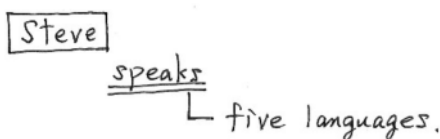
SVOとSVOO

SVO

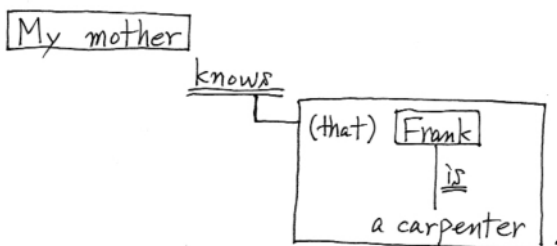
いわゆる第3文型。目的語を1つ従える。

目的語は動詞の右下に置き、**両者の間をL字形の線で結ぶ**。

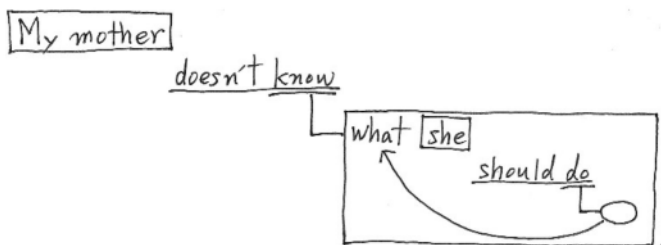
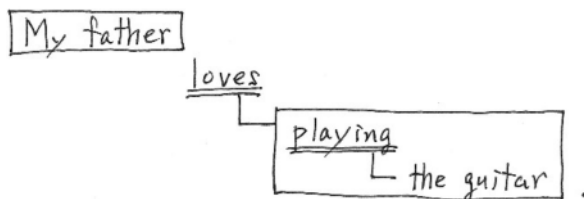
“five languages”のように単純なものは、わざわざ“five languages”とはせず、そのまま表示する。



目的語が名詞節の場合、**節全体を長方形で囲み**、一かたまりのものであることを示す。長方形の内部は、独立した文の場合と同様に図式化すればよい。**略せる要素 (that など) はカッコに入れる**。



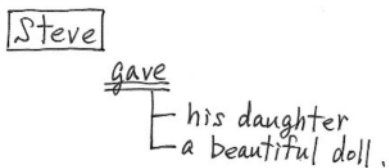
目的語が動名詞句や what 節（間接疑問）の場合も、まったく同様に扱えばよい。



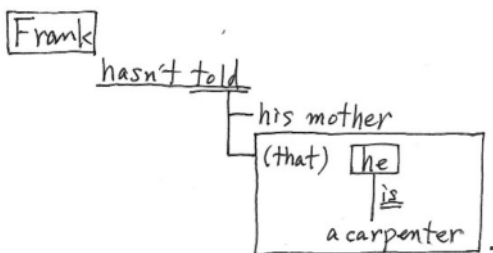
疑問詞については、出所となる部分に を置き、そこからの wh 移動を曲線の矢印で示している。この移動を意識することは、作文時に大きな力を発揮する。

SV00

いわゆる第4文型。2つの目的語を縦に並べて表示する。動詞からは各目的語にL字形の線が引かれる。



直接目的語が that 節などの場合も同様に扱う。



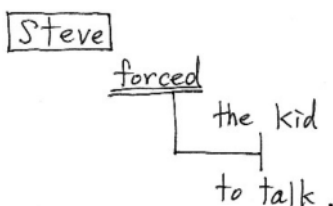
SVOC

本物のSVOC

いわゆる第5文型。目的語と目的格補語を従える。

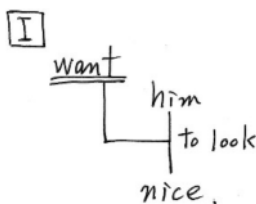
目的格補語は目的語の真下に置き、両者の間を縦線で結ぶ。

動詞からは、その線の中央部に向かってL字形に線が引かれる。語順を崩さないため、目的語(“ the kid ”)は動詞(“ forced ”)の右下に書くようにする。



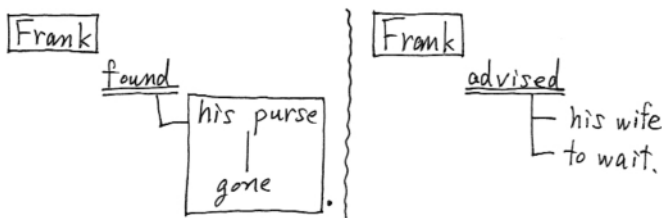
OCの内容がSVC

OCの部分がSVC（例えば“ he looks nice ”）という内部構造を持っている場合は、次のようにする。立体的な構造がいかに視覚化されているか確認されたい。



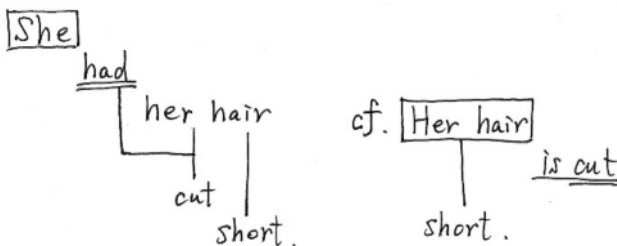
SVO型とSVOO型

一般にSVOCに分類されるものの中には、厳密にはSVO（第3文型）あるいはSVOO（第4文型）であるとされるものがある（安藤『現代英文法講義』等参照）。それらについては、それぞれ下のように図式化してもよいし、単純にSVOCとして処理してもよい。**必要性に応じて使い分ければ足りる。**（左：SVO型、右：SVOO型）



Cが受身で補語付き

具体的には“ She had her hair cut short. ”のような場合。この文では“ her hair ”と“ cut ”との関係は“ had ”によって支配されている（ここまでなら通常のSVOC）が、目的語である“ her hair ”には更に“ short ”という別の補語が付いている。後者の関係を示すため、別途縦線を入れる。別項の「準目的格補語」も参照されたい。



その他の要素

準主格補語と準目的格補語

準補語については、本来の補語と区別するため、線の引き方を工夫する。

準主格補語の場合、文型としてはSVCではないので、動詞は主部の右下に置く。準主格補語は(本来の主格補語と同様)主語の真下に置き、両者を縦線で結ぶ。その結果、縦線と動詞との間に距離ができるが、それが本来の補語の場合(SVC)との違いを示してくれる。比較のため、SVCの例を右に掲げる。

The wind
|
cold.
blew

cf. The wind
|
cold.
was

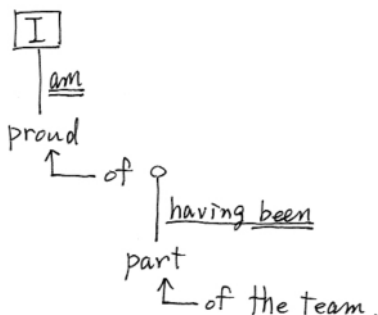
準目的格補語の場合、動詞からの線は直接目的語に向ける。そうすることで、SVO Cの場合(右)との違いが明確に示される。

Frank
ate
└ the meat
 |
 raw.

cf. Frank
found
└ the meat
 |
 raw.

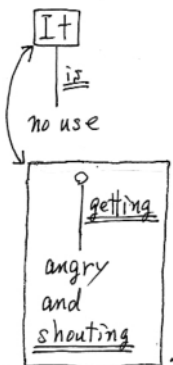
being + 補語

“being + 補語”が前置詞の目的語である場合、“being”以下が一かたまりであることを意識すること（この構文に限らないが、意識するために有用であれば、長方形で囲んでもよい）。図の例では完了形“having been + 補語 + ”となっているが、理屈は同じである。



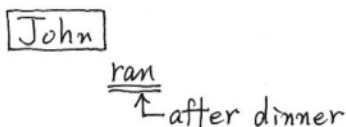
動名詞

動名詞が文の真主語である場合を取り上げる。図の例では“getting + 補語”の後に“shouting”が並列しているが、英語では、このような長いものは主語の位置に置かないのが望ましい。そこで仮主語“it”を文頭に置き、問題の部分は文末に移動する。更に仮主語と真主語との関係を示すため、曲線の両方向矢印を使用している。

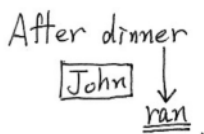


副詞の位置

まずは単純なものから。説明は不要であろう。



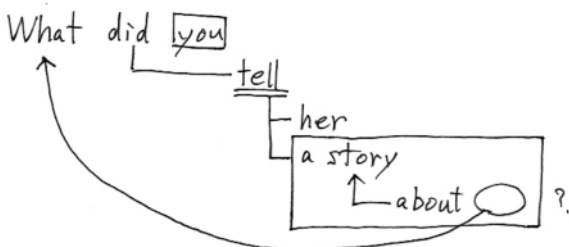
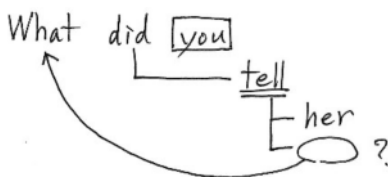
副詞句が文の先頭にあるときなどはどうするか。その場合でも常に「要素を斜めに並べる」と「修飾関係を矢印で示す」の2点を守るようにすればよい。語の配置は変わっても、“after dinner”が“ran”を修飾していることは矢印によって明確かつ簡単に示されている。それが可能であることが、本方式の強みである。



疑問詞

特殊疑問文

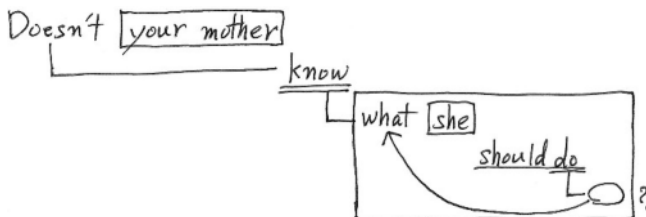
疑問詞については、対応する名詞があったと考えられる位置に を置き、そこからの wh 移動を曲線の矢印で示す。ここでは“what”が文末から移動するケースを2つ示す。この移動方法が正しく理解できれば、作文時にも語順に迷うことがなくなる。



最初の文については、“I told her .”から“ ”に関する疑問文を作り出している。また、後の文については、“I told her a story about .”から“ ”に関する疑問文を作り出している。慣れないうちは面倒に思われるであろうが、いずれも図に書いて、そこから疑問文を自作してみることが大切である。

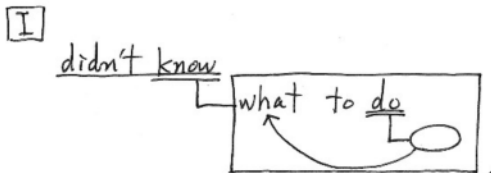
間接疑問文

従属節内の疑問詞については、出所となる部分に を置き、そこからの wh 移動を曲線の矢印で示す。節内はもともと “She should do .” で、そこから “ ” に関する疑問文を作り出している。



what to do

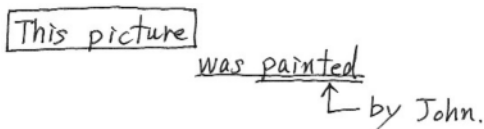
移動に関しては、wh 節の場合に準じて扱えばよい。不定詞句内はもともと “(I) do .” であったことを理解し、そこから自力で不定詞句を作り出してみること。



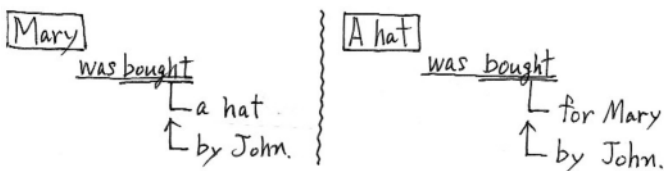
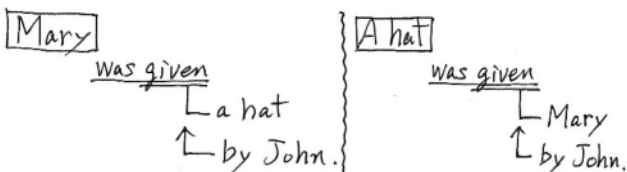
受動態

いずれの場合も be 動詞は助動詞である（過去分詞になっている部分だけが動詞である）ことに注意する。

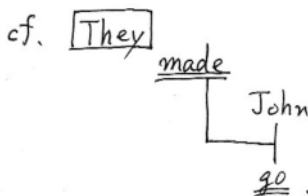
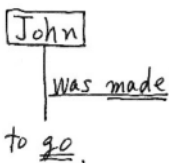
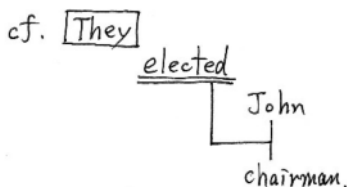
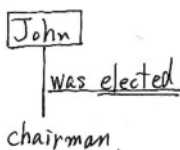
SVOはSVになる。元の文は“ John painted the picture. ”である



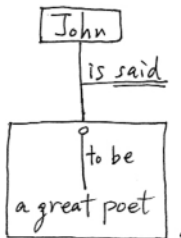
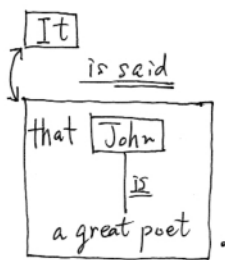
SVOOはSVOになるが、主語の取り方によって2種類が可能。元の文は“ John gave Mary a hat. ”と“ John bought Mary a hat. ”である。受動態にしたとき発生する前置詞の種類（“ give ”のときは“ to ”、“ buy ”のときは“ for ”となる）に注意。



S V O CはS V Cになる。能動態の文を右側に構造図のかたちで掲げておく。S V O CでもS V Cでも、縦線の下にあるのが補語である。能動態から受動態に書き換える場合でも、その関係（能動態では目的語と目的格補語、受動態では主語と主格補語）が維持されていることが、簡単に理解できるであろう。



“be said ...”には2つの構文がある。そのうち“ It is said ...”は仮主語・真主語の構文である。また、“主語 is said to be ...”の場合、S V CのCが“to be ...”になっていると考える。結果、それぞれ次のような図となる。

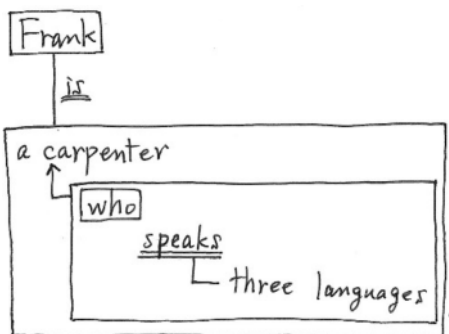


関係詞

関係詞 who

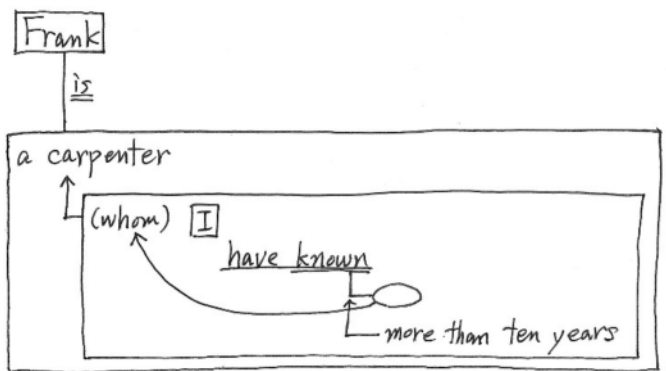
関係詞節は形容詞として先行詞（下例では“a carpenter”）を右側から修飾する。図に書くときは、節全体を長方形で囲み、先行詞に向けて矢印を引く。

関係詞節の内部は、通常の文と同様に書けばよい。節内はもと“A carpenter speaks three languages.”で、そこから“a carpenter”に関する説明を作り出している。このような「作り出す」プロセスは、図に書きながら自力で辿ってやることが大切である。以下、全ての構文について同様。



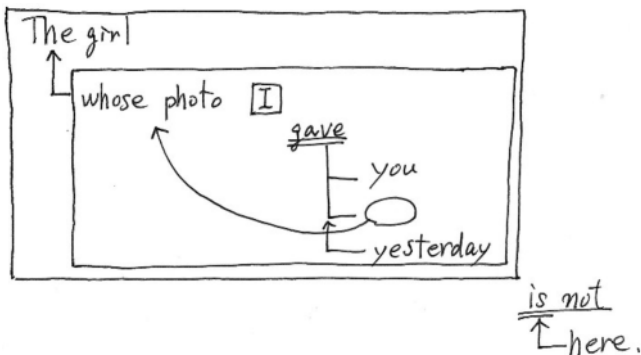
関係詞 whom

“who”の場合と大差ない。修飾は直線の矢印で、wh 移動は曲線の矢印で示されているので、それぞれの意味を正確に理解すること。特に、wh 移動に注意されたい。節内はもともと“I have known a carpenter more than ten years.”で、そこから“a carpenter”に関する説明を作り出している。

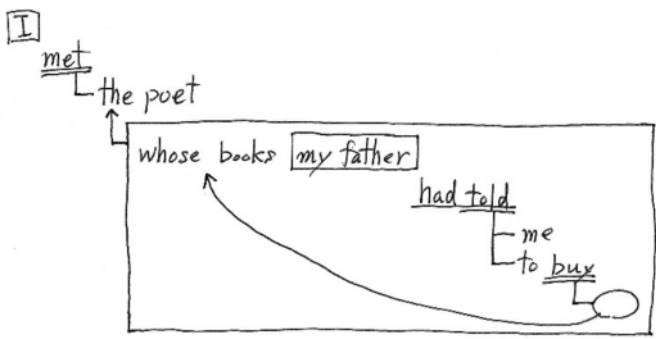


関係詞 whose

下図のようにすればよい。ここでも wh 移動の意味を正確に理解することが大切である。節内はもともと “I gave you the girl's photo yesterday.” で、そこから “the girl” に関する説明を作り出している。

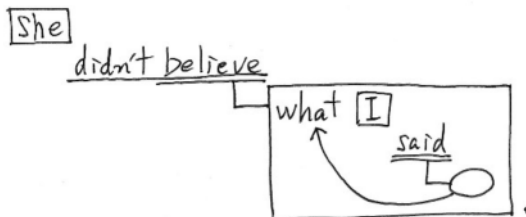


やや複雑なもの。節内はもともと “My father told me to buy the poet's books.” で、そこから “the poet” に関する説明を作り出している。

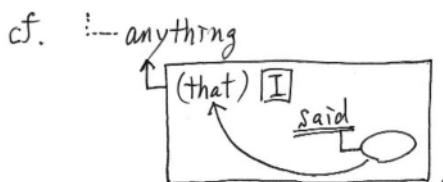


関係詞 what

“ what ” などの場合は名詞節を作るのであるから、それに見合った図式にする。節内はもともと “ I said . ” で、その “ ” を “ what ” にして前に出している。

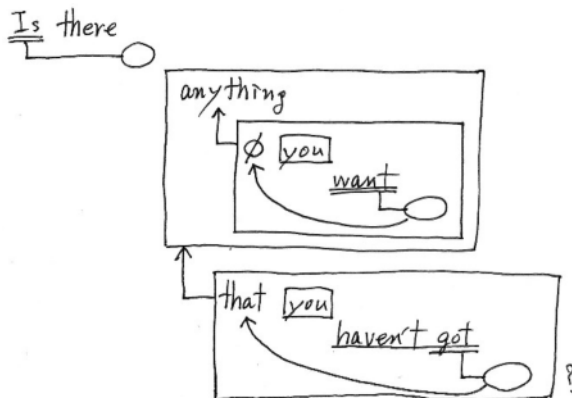


なお、“ what I said ” と “ anything I said ” とでは、形はよく似ていても、内部構造は明確に異なっている。構造図にすれば、その違いがはっきりと視覚化される。“ what ” が「先行詞をそれ自身の中に含んでいる」と言われる理由が実感できるであろう。



関係詞の二重限定

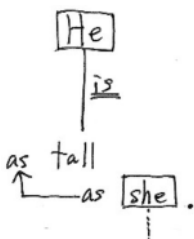
2階建ての修飾になっている場合。ここでは、2つ目の関係詞節は“anything”を修飾しているのではなく、“anything you want”を修飾している、と理解している。それが矢印の使い方に明確に現れている。



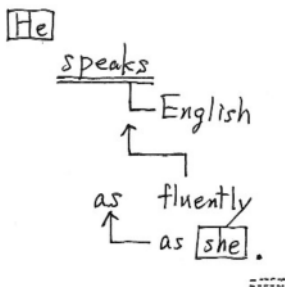
比較

同等比較

まず、主格補語（形容詞）を比較する場合。基本となるのは “He is tall.” であり、その “tall” に “as” が付き、さらにその “as” に “as she (is)” がかかっている。“(is)” を表示するとしたらどのようにすべきかを考えると、2つ目の “as” が関係詞に似た性質を持っていることが理解できるであろう。

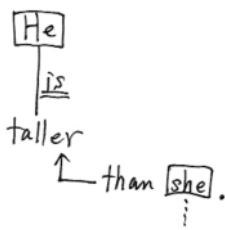


こちらは、動詞を修飾する副詞を比較する場合。基本となるのは “He speaks English fluently.” であり、その “fluently” に “as” が付き、さらにその “as” に “as she (does)” がかかっている。“(does)” については “(is)” と同様に考えればよい。

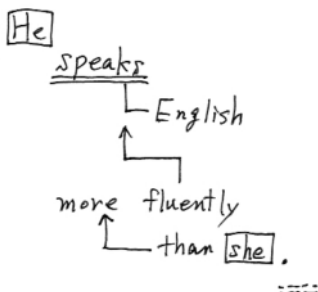


優勢比較

まず、主語補語（形容詞）を比較する場合。基本となるのは “He is tall.” であり、その “tall” に語尾 “-er” が付き、さらにその “-er” に “than she (is)” がかかっている。 “(is)” を表示するとしたらどのようにすべきかを考えると、“than” が関係詞に似た性質を持っていることが理解できるであろう。



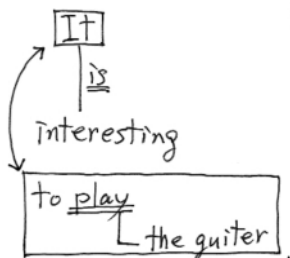
こちらは、動詞を修飾する副詞を比較する場合。基本となるのは “He speaks English fluently.” であり、その “fluently” に “more” が付き、さらにその “more” に “than she (does)” がかかっている。 “(does)” については “(is)” と同様に考えればよい。



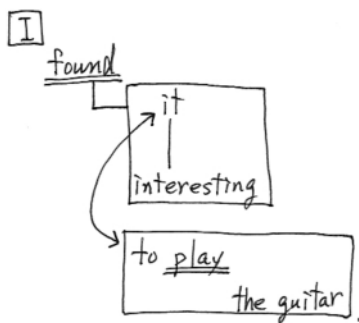
it を使った構文

仮主語と仮目的語

仮主語 “it” の構文は、主語が長くなりすぎないようにするために利用される。真主語である準動詞句や節などを最後に置き、“it” との間を**双方向の曲線矢印**で結ぶ。

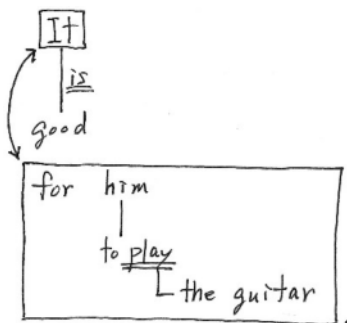


仮目的語 “it” の構文は、目的語が長くなりすぎないようにするために利用される。真の目的語である準動詞句や節などを最後に置き、“it” との間を双方向の曲線矢印で結ぶ。



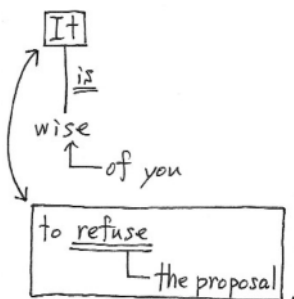
It is ~ for/of 人
to do.

まず“ for ”の場合について。この“ for ”は「～のために」という意味ではなく、次に来る語がその後の“ to do ”の主語であることを示す特殊な標識（「補文標識」と呼ばれる）である。仮主語“ it ”に対応するのは“ for him to play the guitar ”（意味的には“ He plays the guitar. ”）である。両者の間で双方向の曲線矢印で結んでいる。



補文標識としては、この種の“ for ”以外に、名詞節を導く“ that ” “ if ” “ whether ” がある。いずれも標識以降を四角く囲む。囲み内部は「主語 - 述語」の構造を持っている。

次に “ of ” の場合について。この “ of ” に導かれた句は、主格補語 “ wise ” を修飾している。仮主語 “ it ” に対応するのは “ to refuse the proposal ” であり、それが “ wise ” であると言っている。ここでも対応する部分を双方向の曲線矢印で結んでいる。

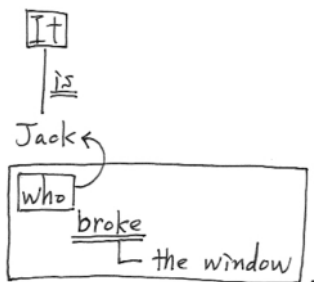


S V O C の O が “ it ” である場合（例えば “ I don't think it possible (for him) to do . ” ）も、同じ要領で処理すればよい。

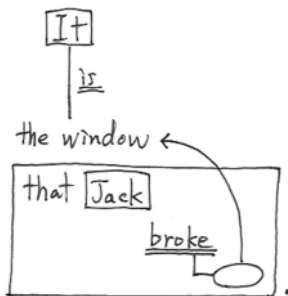
分裂文

いわゆる it ~ that の強調構文。

“ Jack broke the window ”を元の文として、主語である“ Jack ”を強調したい場合。強調したい部分の出所を“ who ”に変更し、曲線矢印で結んでいる。



“ Jack broke the window ” を元の文として、目的語である “ the window ” を強調したい場合。強調したい部分の出所を楕円で表し、曲線矢印で結んでいる。

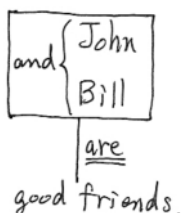


接続詞

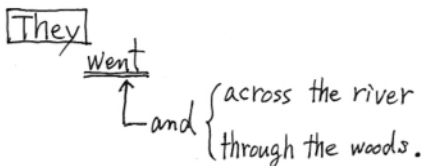
and

等位接続詞の代表として。

まず、主語を複数並べるのに使用した場合。ここでは縦に配置してみた。分かりやすければ別の方法でもよいが、**視覚的に分かりやすいだけでなく、語順を維持していることが非常に重要である。**



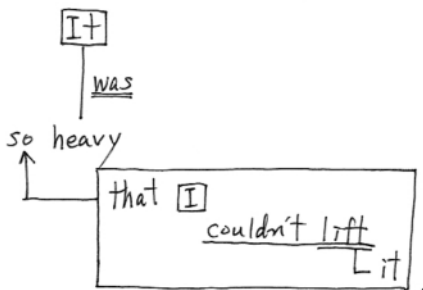
こちらは、動詞を修飾する副詞句を複数並べるのに使用した場合。こちらも縦に配置している。



so ~ that

従位接続詞の代表として。

“ It was heavy. ” が元にあって、“ so ” が “ heavy ” にかかり、更に that 節が “ so ” を詳しく説明している。



これは次のように理解するとよい。

“ It was heavy. ” (基本となる文)

“ It was very heavy. ” (重さを強調)

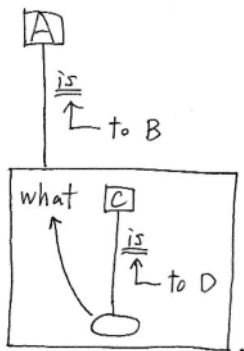
“ It was so heavy ” (具体的には?と思わせる)

+ “ ... that I couldn't lift it. ” (説明を付け足す)

その他の構文

A is to B what C
is to D.

理解困難なことで有名な構文ではあるが、下のように図式化すると、正確な理解が可能となる。



図を注意深く観察すれば分かるように、この構文は

A is to B what C is to D

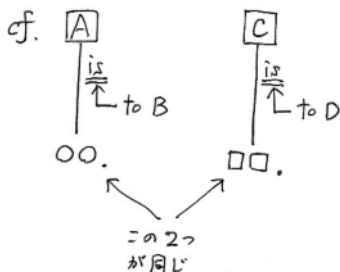
ではない。あくまでも基本にあるのは

A is (to B) と C is (to D)

という2つの関係であり、それらの間に

=

の関係があるのだということを、関係代名詞“ what ”を使って表したものである。



とは言うものの、こういった構造が「ピンと来る」状態になるためには、先に“what”の使い方に充分慣れる必要があるであろう。

倒置

図式化の原則を生かすとすれば、下のようになるであろう。
第2例では“Nothing”と“could”とを別の行にすることもできるが、あまり意味がないと思われるので、同じ行に入れている。

Never have I felt
better.

} Nothing could I find.

May there be
another world war!

So do I.

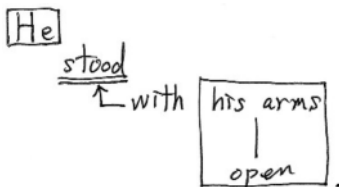
} So I do.

There are strange things happening
to me.

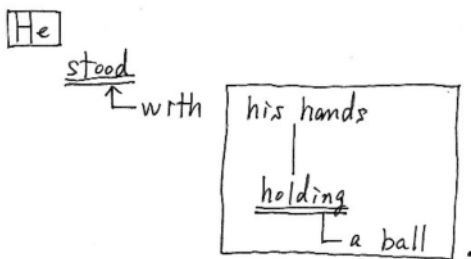
Down went
the bus
over the cliff.

付帯状況

下例の場合、「“ his arms are open ” という状況が付帯している」という意味を表している。ここで“ his arms are open ”はSVCである点に注意する。“with”より後の部分を長方形で囲み、“with”から動詞に向かって矢印を引く。



こちらも同様である。“his hands are holding a ball”はSVCではないが、“holding a ball”は“his hands”の状態を表しているという意味では上の場合と何ら変わらない。



2 構造図の実践例

図式化実験

本当に使えるのか

図式化の方法は前節で説明したとおりであるが、どのような場合にもうまく図式化できるのかという疑問を持たれた方もあるであろう。かつての私自身もそうであった。そこで、更にいろいろな素材について図式化を試みた。

実験 1

最初に取り組んだのが、早坂・戸田『リストラ・学習英文法』の例文である。このテキスト自体、独自の図式化方法を紹介したもので、テキストの余白に私流の図式を書き込んで、逐一比較してみた。このテキストは、具体的な問題意識を強烈に持たせてくれるという意味で非常にすぐれた教材であり、特に付帯状況を表す句の構造や修飾・否定の厳密な分析などなど、非常に勉強になった。

実験 2

次に、綿貫・ピーターセン『表現のための実践ロイヤル英文法』（旺文社）の付録である「別冊 英作文のための暗記用例文 300」に取り組んでみた。例文数は少ないが、いろいろなタイプの例文が含まれているので、実験の対象としては便利であった。結局、B 5 判のノート（7 mm 罫）で 73 ページになった。あまり複雑な例文はないものの、英語的な発想の例文にハッとさせられることもあった。

実験 3

更に、上記『リストラ』で得た問題意識をふまえて、安藤貞雄『現代英文法講義』（開拓社）第 2 章「文型」の例文を図式化してみた。こちらは同じ種類のノートで 18 ページ。ここでは特に S V O C の難しさと面白さを痛感した。

結論

さて、以上の作業をした結果として次のことが言える。

- ・ たいていの文は本方式で簡単に図式化できる。
- ・ 図式化することにより、より基礎的な構造とのつながりが理解できる。
- ・ 図式化の出来具合で構造理解の程度が端的に示される。
- ・ 図式化の過程で悩むことが更なる問題意識の涵養につながることも多い。
- ・ 文中の語句を同時に学ぶことができる。
- ・ この方式で書かれたものは見直すときにも分かりやすい。
- ・ 語順が維持されているので音読しやすい。

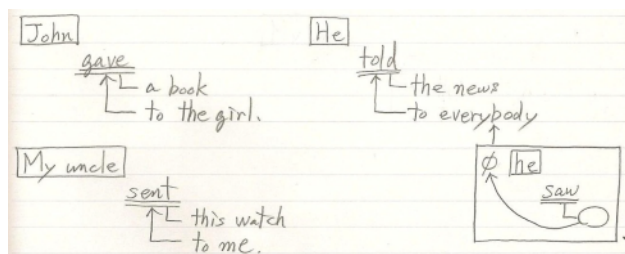
手書きの実例

ここで

参考までに、上記実験等で実際に作成した構造図の中から、いくつかの実例を紹介したい。いずれも私自身の学習の一環として作成したノートの一部であり、ボールペンではなくシャープペンを使用している。そのため少し見づらいかもしれないが、了解されたい。

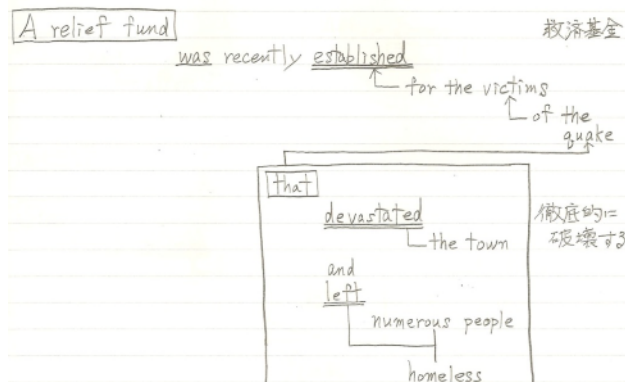
『英文法講義』

安藤『現代英文法講義』p.22 より。



『AIO』

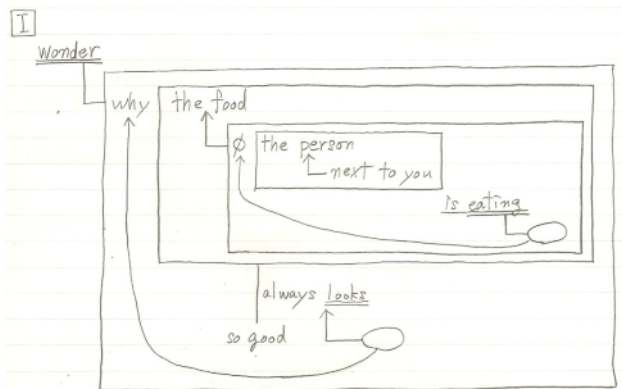
高山英士『ALL IN ONE 4th Edition』(Linkage Club)p.49より。この例では、難しい語句の意味を右端に付記してみた。構造を学びながら語句についても学ぼうという欲張りな発想である。



『必須 1200』

岩村・スマイリー『英会話データベース 必須 1200』（ジャパントイムズ）pp.52, 57 より。

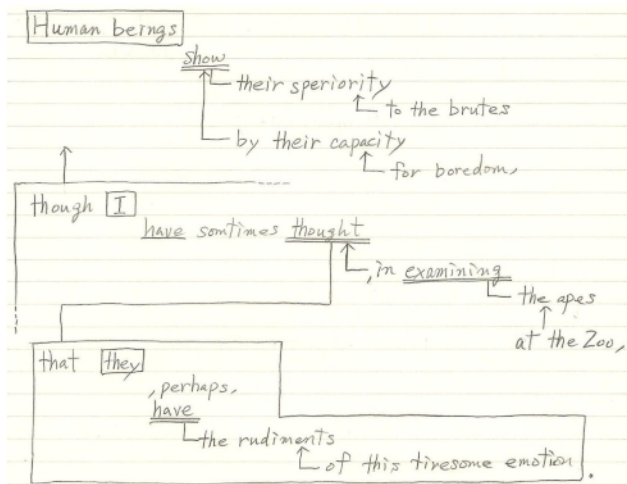
元になる文は “ The food always looks so good because ... ”
 のようなものである。その “ the food ” に “ the person (next
 to you) is eating ” がかかっていて、更にその全体が “ I wonder
 why ... ” の中に組み込まれている。かなり複雑な構造であるが、
 各自で図を書きながら辿っていただきたいと思う。



『英文解釈考』

最後に佐々木高政『英文解釈考』（金子書房）の最初の英文（p.5）。文が長いため部分的に特殊なレイアウトとなっているが、それでも見づらいということはないと思う。

解説は割愛するが、これも図を書きながら自力で辿ってみると非常によい勉強になる。



第2章 構造図の活用方法

1 基本的な活用方法

構造図の特徴と効果

構造図の特徴

英文構造図は意味のかたまりごとに視覚的なまとまりを作り、それらを縦にも横にもずらして配置していく。縦にも横にもずらしてあるおかげで、要素間を線で容易に結ぶことができる。

それにより、**文の構造と要素とを、それらの間の密接な関係を断ち切ることなく、視覚的に分離することができる。**

と同時に、**原文の語順が完全に保存される**という特徴がある。そのため、**完成した構造図は、単純に左上から右下に向かって読んでいけば、原文を再現することができる。**迷うことは全くないので、音読するときにもストレスを感じない。構造が把握しやすい分、原文よりも読みやすいとさえ言える。

もたらされるもの

そのため、構造図を作成することにより、「英文の語順はそのままに、構造を視覚化し、理解することができる」ことになる。

端的には、

理解する（像を明確にする）時に役立つ。

- ・図式化の過程で文の構造が明確に分かる。

記憶する（像を定着させる）時に役立つ。

- ・意味と構造とが一体化となってスムーズに頭に入る。
- ・個々の語句も、文中での位置づけと同時に記憶される。

応用する（像を変化させる）時に役立つ。

- ・語句の入れ替えも簡単に試みることができる。
類似表現や言い換えなどもまとめて学習できる。
- ・転換時の語句移動も分かりやすい。
- ・サイトラでも暗唱でも、英語の語順で考えられる。

という効果がある。また、他の方法と同様、

その他

- ・何百例かやれば、ソラでもできるようになる。

ということも言える。

使い方の全体像

基本方針

全体としては、次のような要領で行うとよいであろう。

- ・易から難へ(構造、長さ、語句レベル)と段階的に進める。
- ・たくさん書く。
書くときには無理な記憶より正確な理解を重視する。
- ・理解と記憶においては、まず正確さ、次にスピード。
学習全体だけでなく、個々の素材についても言える。
- ・必要な事項があれば追記して、構造図を充実させていく。

作成前の準備

構造図を作成する前に、次の手順を経ることが望ましい。

解説がある場合はそれを熟読し、テーマを確認する。

具体的な問題意識を明確に持つことが大事。

和文を見て口頭で英訳してみる。

これにより、更に明確な問題意識が生じる。

間違えた部分は徹底フォローすることも大切。

英文の音声があれば、聴きとれるかどうか試してみる。

構造図の利用法

作成した構造図は以下の要領で利用する。

英文の音声がある場合は十分に活用する。

- ・音声面を確認する。
- ・正確に真似られるようになるまで反復。

英語(語句および文)を音読する。

翌日以降も適宜反復し、必要に応じて暗記する。

必要な素材をあらかじめ構造図内に含めておくことよい。

和訳欄の使い方

右端に和訳欄を付けてもよい。

- ・和訳を見て元の語句や使い方を再現する。
- ・和訳を見て文そのものを復元する。

スラスラできるまでやる。

ノルマ

ノルマについては、次のようにするとよいであろう。

- ・最初は少ない例文数で丁寧に。ドリルも十分に行う。
- ・慣れたら1日100本程度に増やす。
- ・最終的には1日500本ぐらいを目標とする。

どんな素材がよいか

端的に

文さえあれば、どんな教材でもよい。ただし、音声付きであれば、多角的な活用が可能となる。

初心者なら

英文の構造が十分に習得できていない段階であれば、**文法的な順序で例文が掲載されているものを使うのがよい**であろう。例えば、易しめの文法書（例文集が付属しているものもある）や文法項目別例文集である。通常の入門書や中学校レベルの教科書・参考書などを最初から順にやるのもよい。

この段階では、例文の数は少な目（多くて数百本）にし、習熟度を高めることに専念する。知識レベルに終わらず、能力化するまで反復することが大切である。

文の構造を学ぶ

文の構造について体系的に学ぶには、**高校・一般向けに書かれた文法書の最初の部分**（たいていは3章程度にまとめられている）を丁寧に読むとよい。網羅性が欲しい場合は、例えば阿部友直『英語文型完全トレーニング』（テイエス企画）なども使えるが、「文法書の最初の部分」がしっかり理解できていれば通常の文法書でも問題ないであろう。いずれにしても、教材に掲載された全例文を、易しいものから順に一つひとつ図式化してみることが大切である。

構造を学んだ後は

文法的なことが一通り吸収できたら、今度は徐々にバラバラな順序で学ぶようにしていく。そうすることで柔軟な能力が身に付くはずである。

この段階では多様な語句や表現が載った教材を中心に学び、それに慣れてきたら、まとまった内容の文章を素材にするとよい。

手書きかパソコンか

パソコンは使いにくい

見た目の綺麗さや柔軟な編集可能性を重視するのであればワープロソフトなどを使用するのがよいであろうが、手間がかかりすぎるのが難点である。そのため、よほどのことがない限りは、**ノートに手書きするのが現実的**である。ある程度丁寧に書いた場合でも、**1文あたり1～2分もあれば作成可能**である。

ノートの大きさ

ノートの種類であるが、文の長さや構造にもよるものの、B5判程度のノートが一番使いやすいように思う。罫線の間隔は6mmでも7mmでもよいが、字が大きくなりすぎると横幅が足りなくなることがある。本書に掲載されているサンプルを参考にされたい。

筆記用具

筆記用具としては、書き直し可能な**シャーペンが使いやすい**。仕上がりの面からはコントラストが高いボールペンに軍配が上がるが、普段の学習においては、気楽に作業できることの方がはるかに重要であろう。

(ただし本書の大部分ではコントラストを高めるためにジェルボールペンを使用している。)

注) 現在は別に PC 版が存在している。

<http://kouzouzu.web.fc2.com/index.htm>

賢い使い方

類例をまとめて

文の構造が同じであれば、対応する図の形も同じになる。そのため、各部分用の置換語句リストを準備しておけば、まとめて学ぶことができる。リストを見ながら、該当部分を次から次へと置換していくとよい。

テキストの余白に略記

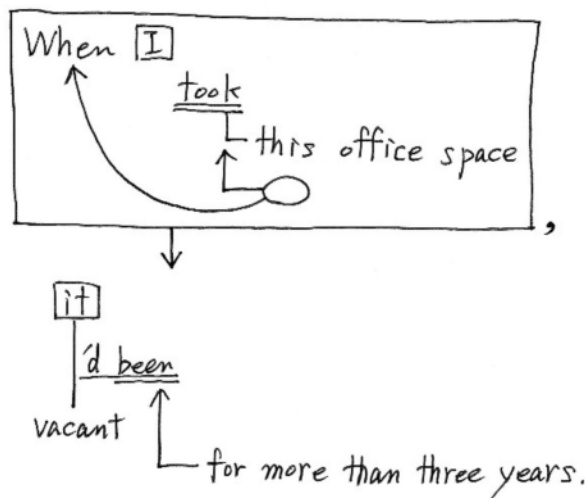
テキストの余白に書き込む場合、例文そのものはすぐ近くに印刷されているわけであるから、構造だけ示せば足りる。そこで**枠や折れ線、矢印と必要最小限の語句だけを記入する**ようにすれば、かなり小さなスペースでも活用することができる。

2 例文学習での活用方法

構造を理解するときに

例文を図式化

まずは例文や解説を見ながら、次のような図を書いてみる。



確認

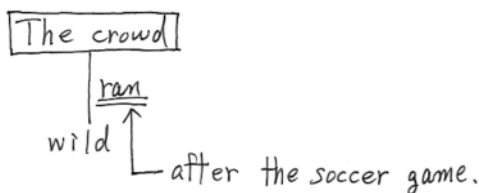
図ができれば、元となる文である “I take his office space.” や “It is vacant.” がどのように埋め込まれているかを確認していただきたい。図式化する過程でほぼ理解はできているであろうが、図を見ながら再度丁寧に観察することが大切である。そうすることで、この例文が生成される仕組みが正確に理解できるはずである。

例文を覚えるときに

音読的な方法 1

一番簡単なのは、作成した構造図を「音読」することである。本方式の構造図では例文の語順が維持されているので、迷うことなく音読することができる。

しかし簡単であるがゆえに、いわゆる「目から口へ」になってしまう可能性もある。それを避けるため、文構造や意味内容を意識しながら正確な音声で読むようにしなくてはならない。



リテンション的な方法

構造図を作成した後、目を閉じてその形を思い出しつつ口頭で再現する。この場合ももちろん、文構造や意味内容を意識しながら行うことが大切である。それも、自分で言葉を発しているかのような気持ちになればベストである。

文構造が覚えにくい場合は、図の形をよく観察して、その視覚的特徴に注意を向けるようにするとよい。

音読的な方法2

覚えたい語句を先頭2文字だけにして構造図を作り、それを音読する。



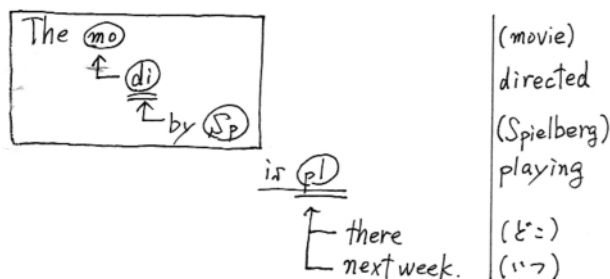
右側には略記した語句の元の姿を記しておく。音読においては一部の語句が先頭2文字だけになっていることが負荷になるわけであるが、やってみると実は意外に簡単である。

最初からこのタイプの図を作成してもよいが、**リテンション**に際しては、語句を（先頭2文字だけでなく）本来のかたちでイメージすること。

キーワードから 例文を再現

例文自体に慣れてきたら、今度は**右側に書かれたキーワードだけを見て、例文を再現してみる**。（図は上と同じ。）

キーワードが足りない場合は補充する（それらは例文再現のヒントとしてのみ用いる語句なので、カッコに入れて区別しておく）。

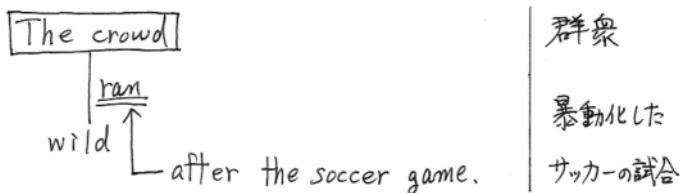


このように英語の語句から例文を再現する場合、語句の使い方は正確に覚えている必要があるが、和訳は必須ではない。意味と使い方が分かればよいわけである。

最初のうちは、個々の語句の意味を思い出すのは難しいかも知れないが、何度も反復していれば次第に慣れてくるはずである。

キーワードの和訳から例文を再現

今度は右側の語句を日本語訳にする。



この場合は、元の語句とそれらの使い方の双方を正確に覚えていなくてはならない。最初のうちは難しいであろうが、これもやはり徐々に慣れていけばよい。

まとめた図

上では複数種類の図を紹介したが、**同じものを継続的に使用する方が現実的**である。

つまり最初は「略記を含めた構造図」+ 語句リストのみ作成し、「和訳から例文を再現」を行うときに右端に和訳を書き足すのである。最終的には次のような図になる。



横幅の長いノートを用意して、右端に2列分のスペースを確保してから構造図の作成にとりかかるようにすればよい。横罫入りのノートを使うのであれば、縦罫の下敷（無地のルーズリーフに付属していることが多い）を使うと便利である。

なお、最終段階では重要語句の英日対照リストが右側に存在しているので、これを使って語句ごとに「英 日」「日 英」想起の訓練をすることも可能である。

簡略化した方法

いわゆる DUO 型単語集の場合、例文を構成する語句の多くが「見出し語」としてまとめて表示されているので、そのリストを見て例文を思い出せるかどうかやってみるとよい。

その際、構造図作成に慣れている人であれば、図は書かずに頭にイメージするだけで済ませることもできるであろう。

しかし、作成に慣れていない人の場合、あるいは未知の語句が比較的多い場合などは、**手間をいとわず紙に書く**べきである。そして、音読などの反復によって構造と語句に馴染むようにする。

4 技能実践のときに

聞いたり読んだりするとき

英文を聞いたり読んだりするときに、この構造図を活用することができる。

方法は簡単で、**聞いたり読んだりしながら構造図を思い浮かべる**ようにする。思い浮かべる図式は、テキストの余白に書くときのようなシンプルなものでかまわない。最初は書かれた素材を使って練習し、音声素材はごく遅めのものから順にやっていくとよい。例文学習での活用から始めるとよいであろう。

この方法は、名詞節が目的語になっているときのように、**日本語と英語とで語順が大きく異なっている場合に特に威力を発揮する**。分かりにくい部分について**長方形と矢印**を思い浮かべるようにすると、**情報のまとまりとそれらの間の関係**とを頭の中でコントロールしやすくなるのである。

慣れればスムーズに処理できるようになるが、少しでも難しいと思ったときは、労をいとわず紙に書くべきである。分かりやすささえ犠牲にしなければ、走り書きでかまわない。

話したり書いたりするとき

発信するときも同様であり、図を頭にイメージしながら行うことで、構造上のミスを防ぐことができる。ただし、普段からの積み重ねが必要である。

著 者：大 橋 穰 二 (George Ohashi)

「物好鬼(ものずき)」はブログ「英文構造図の館」でのハンドル。

1965 年山口県生まれ、東京大学理科 類から教育学部卒。

中学時代より学習法・上達論に関心を持ち続ける。

卒業後は出版・資格業界等において、Web・紙媒体双方の編集・制作に従事。

学生時代は n88-BASIC、現在は JavaScript 中心に、プログラミング歴 25 年。

フリーの英日翻訳者、武道家でもある。

『英文構造図』

平成 22 年 6 月 14 日 初版発行

平成 22 年 7 月 23 日 わずかに修正

平成 22 年 8 月 15 日 一部の見出しを修正

平成 22 年 10 月 5 日 改訂版発行

平成 22 年 10 月 6 日 わずかに修正

平成 22 年 10 月 31 日 わずかに修正

平成 22 年 12 月 30 日 何力所か修正

平成 24 年 9 月 10 日 何力所か手直しし「手書き版」として復活